Report

調査報告

中国甘粛省・陝西省の石窟寺院を訪ねて
―二〇一七年度の調査から―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　吉田　一彦

甘粛省・陝西省の石刻調査

仏教と神信仰が融合、複合する宗教現象は、日本では「神仏習合」と呼ばれることが多く、かつては日本独自の宗教現象だと理解されることがあった。しかし、そうした宗教現象は日本だけではなくアジアの東部や中部に広く見られ、日本に特色的に見られる現象ととらえることはできない。日本の文化史、思想史の解明には、仏教と神信仰の融合、複合のあり方の特質を解明し、それを他の国や地域における宗教の融合、複合の様相と比較してそれらとの共通性および差異を明らかにし、日本の宗教をアジアの宗教の歴史の中に位置づける作業が重要な研究課題になる。

こうした観点から、私たちは、現在、日本学術振興会科学研究費の補助を受けた共同研究「神仏融合から見た日本の宗教・思想とアジアの比較研究―分野横断による人文学の再生―」（基盤研究（A）、研究代表者吉田一彦、二〇一七～二〇二一年度）に取り組んでいる。二〇一七年度は、共同研究チームによって中国甘粛省、陝西省の石窟寺院の調査を実施し、五胡十六国時代から南北朝時代、隋唐時代への仏教史の展開の特質や、仏教と神信仰の融合の様相、信仰の特質などについて多くの知見を得、日本の宗教史との比較研究を行なうことができた。ここでは、調査の概要を覚書として記述しておきたい。

調査は二〇一七年九月八日～一八日に実施した。参加者は、吉田一彦、曾根正人、上島享、関山麻衣子、高井龍、高志緑、高橋早紀子、渡邉将智、折山桂子、手嶋大侑で、吉田と高井は公務の関係で一五日に帰国した。なお、今回の調査では、高橋早紀子氏を通じて、白鶴美術館の田林啓先生から、麦積山石窟芸術研究所の李天銘副所長先生、および天水市博物館の高世華副館長先生をご紹介いただき、学術交流をすることができた。両先生および田林啓先生にあつく御礼申し上げる次第である。

今回の調査対象地は次の通りである。

二〇一七年九月八日～一八日

八日　日本から蘭州へ。

九日　甘粛省博物館、白雲観、白塔寺、五泉山。

一〇日　炳霊寺石窟。一般公開窟および一六九、一七二、一二六、一二八、一三二号窟。

一一日　木梯寺石窟、水簾洞石窟群のうち垃稍寺石窟、水簾洞石窟、顕聖池石窟。

一二日　麦積山石窟。麦積山石窟芸術研究所にて李天銘先生らと学術交流。一般公開窟および四四、四三、七八、一三五、一三三、一二七、一一五号窟。

一三日　天水市博物館、高世華副館長先生らと学術交流、伏羲廟、大像山石窟、玉泉観。

一四日　仙人崖、麦積山石窟（再調査）。

一五日　慈善寺石窟、法門寺。

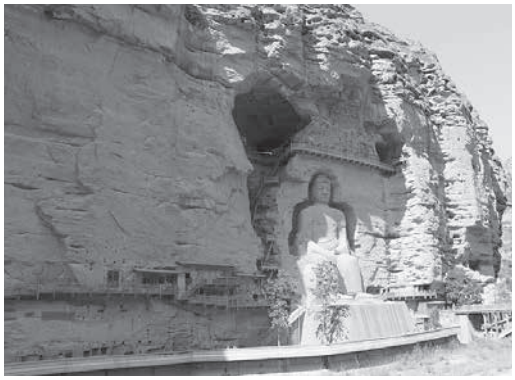
一六日　王母宮石窟、南石窟寺。

一七日　北石窟寺、大仏寺石窟。

一八日　碑林博物館。

五胡十六国時代の仏教

甘粛省永靖県の黄河上流域北岸の小積石山にある炳霊寺石窟(1)は、中国最初期の石窟としてよく知られている。私たちはガイドの白布仁さんともども専用車に乗って蘭州市内のホテルから劉家峡ダムまで行き、そこの船着き場から快速ボートに乗り換えて石窟に向かった。幸いにも天気に恵まれ、順調にダム湖を進んでいくと、やがてあたりは特色ある紅砂岩の山がむき出しの岩肌を見せるようになり、水の色も黄色がかってくる。進むこと一時間弱で炳霊寺石窟に到着した。この石窟は大変な奥地の山中に開鑿されており、中国にとって仏教がもともとどのような宗教だったのかを私たちに実感させてくれる。


炳霊寺石窟　全景

炳霊寺石窟には、五胡十六国の西秦時代から南北朝隋唐時代の彫刻、壁画が多数あり、さらに宋元明清時代のものも見られる。中国最初期というのは、一六九号窟内に題記があって、それに西秦の「建弘元年」（四二〇年）という極めて古い年号が確認できることによる。

私たちは、早速、入り口からすぐの「老君洞」（一八四号）から見学をはじめた。この洞の老君像は明代のものであるが、壁面に壁画があり、釈迦・多宝二仏坐像、七仏像等を確認することができた。壁画は北魏のものだという。続けて、八・六四メートルと大変大きな釈迦涅槃像（彫刻）を見学した。これも北魏の時代のものだという。これは位置的にダム湖に沈むところにあったものを取り出して、現在地に移置したものだという。

炳霊寺石窟　大仏と頭上の二つの窟

炳霊寺石窟老君洞　老君像

私たちは、やがて著名な炳霊寺の大仏の正面へとやってきた。この大仏の頭部上方の左右に一六九号と一七二号の二つの窟がある。どちらも自然の洞窟を活用したもので、特に一六九号窟は大きく、炳霊寺石窟最大の窟だという。私たちは地上からジクザクに長く設置された階段を息を切らして一六九号窟までよじのぼった。登り切ると右手の壁の壁画や彫刻の数々が目に飛び込んでくる。同じその壁の少し先の方には題記が

記された長方形の部分も見えてくる。これが一六九号窟の北壁である。題記は、現在、透明のカバーで覆われて保護されているが、カバー越しに多数の文字を確認することができ、最終行には「建弘元年歳在玄□三月廿四日□」の文言を判読することができる。

題記の向かって左には、如来坐像と左右の菩薩立像からなる彫刻の三尊像がある（六号龕）。これの中尊のところの壁には「无量壽佛」という札銘が、向かって右の菩薩のところには「得大勢志菩薩」という札銘があって、これが阿弥陀三尊像であることが知られる。中尊は台座上に結跏趺坐し、両手にて禅定印を結んでいる。衣服には十字を中に描く亀甲文が描かれている。これには頭光と光背が描かれ、どちらにも火焔文が施され、光背の内周にはそれぞれに楽器を持す伎楽飛天たちが描かれている。

一方、題記の向かって右には如来立像（彫刻）があり、そのすぐ向かって左隣に別の立像の左肩・手・足および光背の一部が残る（七号龕）。この如来立像は顔立ちにインド風なところがあるのが印象的である。現地説明者の方によると、衣紋にU字形が見られるのが特徴的であるという。これにも頭光と光背が描かれ、どちらにも火焔文が施されている。頭光の内周には十二の坐仏がずらりと描かれている。

その下方には、多数の大変興味深い壁画が描かれている。その中の一つの如来坐像〈説法図〉（一二号龕）は、やはり顔立ちに西域風のところがある。面白いのは、台座の蓮華の外側にさらに渦巻のような文様が描かれ、光背の上部に花らしきものが七つ描かれていることである。この如来の左右には、菩薩や飛天たちが描かれているが、向かって左の菩薩の下方には、台座上に片膝立てて胡跪し、両掌を上向きにつけるようにして前上方に差し出し、何かを捧げるようにした独特の尊格が描かれている。その風貌は明らかに高鼻深目の西域人であり、頭髪は上方に特別に結い上げられた髪型になっており、火焔の頭光が描かれている。これは、仏教と他の宗教との関係を表現する場面である可能性があり、参加者一同、現場であれこれと意見を交わした。

一六九号窟には、この北壁以外にも、西壁、南壁にもずらりと絵画、彫刻が見られ、千仏壁もあってまことに壮観である。中国には西暦一世紀頃に仏教が伝来したが、それが社会に広く流布していくのはしばらくの時間を経たのちの四世紀のことになる。それは五胡十六国時代になってのことで、胡人の王朝によって仏法興隆がなされたのである。西秦（三八五～四三一）は鮮卑乞伏部の乞伏国仁が建てた国で、現在の蘭州市を中心に勢力を有していた。今回、中国における流布開始期の仏教に触れることができ、最初期から阿弥陀如来、弥勒菩薩、維摩居士と文殊菩薩などへの信仰があったことを間近に実見することができたのは大きな収獲だった。

私たちは、その後、桟道（天橋）を渡って一七二号窟に入り、北魏や北周の時代の仏像等を見学して階段を降りた。なお、間近に見ることができた大仏は弥勒の椅坐仏で、像高は二七メートル、唐代のものだという。

地上では、北魏の延昌二年（五一三）の成立という一二六号窟にて、釈迦・多宝二仏並座像〈西壁〉、交脚菩薩像（三尊像）〈北壁〉、仏菩薩三尊像〈南壁〉などを実見することができ、さらに北魏のほぼ同時期の成立と考えられる一二八号窟、一三二号窟の諸仏を実見することができた。一三二号窟には、釈迦・多宝二仏並座像〈西壁〉に向かい合う東壁に釈迦涅槃像の浮彫があり、また南壁の交脚弥勒菩薩像の両足を力士が足下で支えていた。

その後多数の一般公開窟を調査して、北周、隋、唐、宋などの仏教文化について多くの知見を得ることができた。

北涼の仏教

今回の調査では、甘粛省博物館において、北涼の承玄二年（四二九）の銘を持つ田弘石造像塔や、北涼の承陽二年（四二六カ）の銘を持つ馬徳恵石造像塔（いずれも酒泉市出土）など、北涼の石造像塔（造像石塔）を見学することができた。北涼石塔は北涼の仏教を考察する上で重要な史料となるものである。また、天梯山石窟（武威市）の北涼時代の壁画二点（菩薩立像および供養菩薩像）が展示されていて、実見することができた。彩色が豊かな美しい壁画であった。五胡十六国時代の仏教を解明することは、中国においてどのようにして仏教が流布、展開を遂げたのかを知る上で重要な情報を与えてくれる。

仏道合一の聖地

甘粛省武山県の鐘楼山にある水簾洞石窟群[2]には、a垃稍寺、b水簾洞、c千仏洞、d顕聖池の四箇所にわたって石刻、壁画等が見られるが、今回、c千仏洞は道路遮断修復中で立入禁止のため見学することができず、他の三箇所を見学した。

水簾洞石窟群　垃稍寺　大仏

a垃稍寺には「大仏」がある。これは巨大な三尊仏の摩崖浮雕で、三尊の周囲にも種々の浮雕、壁画が多数造形されている。現地案内板によると、中尊の大仏の高さは四二・三メートルもあるという。大仏が結跏趺坐する座は七層に構成されていて、そこに獅子、鹿、象などの動物が多数描かれている。この摩崖浮雕には、向かって右側の菩薩像の足元右外あたりに題記が記されているのが確認でき、その冒頭に「大周明皇帝三年歳次己卯二月十四日」の文言が判読できる。ここから、これが北周の明帝の武成元年（五五九）のものであることが知られる。また、向かって左側の菩薩像の左外側の柱部には、仏説法図や浄土変相図などの壁画が複数描かれている。全体としては、北周に作られ、その後、北周末～隋

水簾洞石窟群　垃稍寺　仏座

水簾洞石窟群　垃稍寺　浄土変相図

初、隋、晩唐～五代・宋、元などの時代に重修、追加がなされたものだという[3]。

b水簾洞は自然の洞窟で、現在はその前に道観が建立されていて、仏道合一の宗教聖地になっている。この洞窟外部の壁面には仏説法図等の壁画が描かれている。現地案内板によると、これらは北魏、隋、唐、元の時代の壁画であるという。ただ、建物の屋根によって視界が遮断されてしまい、全体像が展望できないのは残念であった。ここの道観は、菩薩楼、老君閣、四聖楼、五宮菩薩楼、聖母殿、送子娘娘殿、薬王殿、邱子殿、土地祠などの建物からなる。このうち五宮菩薩楼には五人の娘娘がまつられるが、その一人の「麻銭娘娘」は民間伝説で大勢至菩薩の化身と語られているという[4]。

d顕聖池にも自然の洞窟があり、洞窟外側の壁面上方に仏の説法図および千仏の壁画が描かれている。現地案内板によると、約四十平方メートルにわたる絵画で、隋代のものだという。

麦積山石窟の浄土変相図

甘粛省天水市麦積区の麦積山石窟は、中国を代表する仏教石窟の一つである[5]。今回の調査では、二回にわたってこの石窟を訪れて多数の彫刻、壁画等を実見して多くの知見を得ることができた。また、田林啓先生のご紹介により、麦積山石窟芸術研究所の李天銘副所長の学術交流をすることができ、李先生の御高配によって、一般公開窟とあわせて、特別窟の四四、四三、七八、一三五、一三三、一二七、一一五号窟を見学することができたのは大きな幸いであった。

水簾洞石窟群　水簾洞　壁画

麦積山の名は、早く、慧皎『高僧伝』巻十一「釈玄高伝」に見える[6]。これによると、玄高という僧がおり、彼は秦の弘始四年（四〇二）の生まれで、十五歳にして山僧に説法するまでになり、受戒ののちは禅律に専精したという。やがて彼は西秦にお

水簾洞石窟群　水簾洞　娘娘像

麦積山石窟

もむき、「麦積山」に「隠居」したが、この時山で学んでいた「百余人」は、彼の学問を崇め、彼から禅道を学んだという。この時、長安の沙門の釈曇弘がこの山にいたが、玄

麦積山石窟　５号窟第３龕外　西方浄土変

麦積山石窟　５号窟

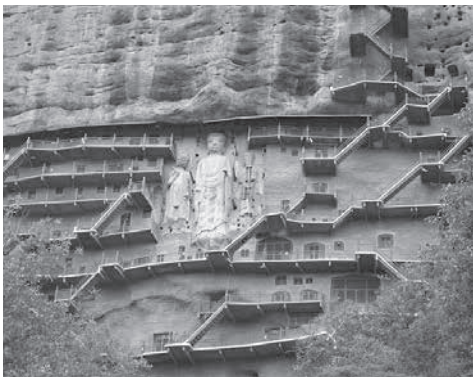
高と相まみえて親密になったという。以上から、麦積山は、五世紀の初め頃（西秦の時代）に、すでに百余人（後文では三百人）の仏教者が滞在、学問し、長安の沙門がここに来て活動することがあるような山であったことが知られる。

私たちが見学した七八号窟は、麦積山で最も初期の窟の一つと考えられているもので、正壁には仏坐像と脇侍菩薩像の三尊像があり、北魏初期のものだという。これの中尊の基壇部分には多数の供養人たちの像が列立する壁画がびっしりと描かれており、それは向かって左壁に安置される如来坐像の基壇部分にも続いている。ここに描かれる人物たちは、鮮卑突騎帽をかぶり、胡服を着している。また、背後の壁には、上方左右に小龕が二つあり、向かって左のものには交脚菩薩像（脇侍二体あり）、向かって右のものには半跏菩薩像（脇侍二体あり）が浮雕されている。

一一五号窟は、麦積山で最も古い銘文が残る像として知られている。正壁には如来坐像が安置され、左右の側壁に脇侍の菩薩立像が各一体まつられている。如来坐像の須弥座には銘文があり、「大代景明三年九月十五日」の文言が確認され、北魏の景明三年（五〇二）の銘文であるこ

大像山石窟　大仏

麦積山石窟　東崖　摩崖泥塑三尊像



麦積山石窟　西崖　摩崖三尊像

とが知られる。なお、如来像の左右には縦に複数に区切られた区画があり、各区画に壁画が描かれ、全体で一つの物語が構成されている。

私が最も注目したのは、一二七号窟である。これは西魏の時代の大窟で、中には仏像（彫刻）だけでなく、多数の壁画がある。それは、涅槃経変、維摩経変、西方浄土変、過去七仏、十善十悪図、薩埵太子本生図、睒子本生図、そして帝釈天図（天井）などである。このうち西方浄土変は、中国における最初期の西方浄土変として知られるもので、この図柄の成立過程を知る上で重要な作例となるものであり、またたとえば日本の当麻曼荼羅の源流を考察する上でも重要な作例になるだろう。今回、これを実見することができたのは大きな収獲であった。

［注］

(1) 甘粛省博物館・永靖炳霊寺文物保管所編『中国文物小叢書　炳霊寺石窟』文物出版社、一九八二年。甘粛省文物工作隊・炳霊寺文物保管所編『中国石窟　炳霊寺石窟』平凡社、一九八六年。田林啓「炳霊寺石窟野鶏溝（第一九二窟）の北朝壁画について」『仏教芸術』三〇八、二〇一〇年。甘粛炳霊寺文物保護研究所編『中国石窟芸術　炳霊寺』江蘇鳳凰美術出版社、二〇一五年。大竹憲治「河西回廊の石窟寺院に見る供養人物壁画考」『考古学論究』一七、二〇一六年など。

(2) 甘粛省文物考古研究所・麦積山石窟芸術研究所・水簾洞石窟保護研究所編『水簾洞石窟群』科学出版社、二〇〇九年。張玉璧等『武山水簾洞石窟芸術研究』中国社会科学出版社、二〇一四年など。

(3) 注2『水簾洞石窟群』。

(4) 注2『水簾洞石窟群』。

(5) 名取洋之助『麦積山石窟』岩波書店、一九五七年。天水麦積山石窟芸術研究所編『中国石窟　麦積山石窟』平凡社、一九八七年。久野美樹「中国初期石窟と観仏三昧」『仏教芸術』一七六、一九八八年。八木春生「麦積山石窟西魏窟に関する一考察」『芸叢』二〇、二〇〇三年。同「麦積山石窟北周窟に関する一考察」『芸術研究報』二六、二〇〇五年。同「天水麦積山石窟編年論」『泉屋博古館紀要』二五、二〇〇九年。魏文斌・呉荘『甘粛仏教石窟考古論集』民族出版社、二〇〇九年。花平寧・魏文斌編『中国石窟芸術　麦積山』江蘇鳳凰美術出版社、二〇一三年など。

(6) 吉川忠夫・船山徹訳『高僧伝（四）』岩波文庫、二〇一〇年。